

2023高校入試研究会第3弾

「秋の合格ガイダンス」

2023年11月23日(木・祝)①10:00-11:40 ②13:00-14:40

信学会ゼミナール上田駅前校

<第3部 受験までの家庭のあり方> スクリプト

第3部では、私から「家庭のあり方」についてお話します。
資料の13ページに メモ欄をご用意させていただきました。
画面でお示ししながらお伝えしますが
メモを取りにくいこともあるかと思えます。
これからお話する内容を 文字に起こして
明日以降 上田駅前校のHPにアップしますので
もしご興味があれば 裏表紙のQRコードから読み込んでいただき
原稿の形でご覧いただければと思います。

では 内容に入ります。

受験を控えたご家庭の雰囲気や想像するに
お子さまの体調管理や 生活の様子などから
保護者の皆さまは 一番身近なところからサポートをされる中で
歯がゆい思いや 焦り 不安や心配は尽きないものだと思います。

私も高校生の子どもの持つ母親なのですが
子どもというのは ついこの間生まれたとってたら
いつのまにか10数年も経っていて
自然と 自分ひとりでできることも多くなって
周囲を思いやることができる一面も 垣間見える中で
成長を実感することがありますよね。
ただ 子どもの成長を信頼してそっと焦らず見守る ということの難しさも
同時に感じる毎日です。

ここからちょっと堅い話になりますが
「成人発達理論」という学問があって
これは人間の成長 発達のメカニズムを解明するものなのですが
それによると「成長には段階がある」ということなんですね。
人間の知性や意識は 一生をかけて成長する と言われていています。
ですから私たち大人も まだ成長の最中だ ということになります。

この成長には段階がある ということなのですが
こちらが「成人後の4段階」を示すスライドです。

成人後の4段階



まず自分軸と 他人軸があります。
この二つを行ったり来たりしながら 人は成長していくと考えるわけですね。
自分の輪郭を書き換えていく これは大人にとっても大きな冒険ですよ。

まず第一段階として

①道具主義的段階（10%）

自分の関心や欲求を満たすことが優先で
他者を そのための道具のように捉えている。
他者の感情や思考を理解することが難しく
白黒・二分的な世界観をもつ。

こちらは 成人後の段階1ですので
子どもたちはまだこのスタートラインには立っていない
この前段階ということになります。

続いて第二段階として

②他者依存段階（70%）

組織に従って生きる。
周囲からの見られ方や 期待に応えることが 重要だと考える。
「親が」「上司が」という言葉を多用する傾向があり
自らの意志決定基準をもたない。
日本人のほとんどは この段階にあると言われています。

続いて第三段階です。

アメリカの企業では この段階に達した人物を
リーダーに求めると言われています。

③自己主導段階（20%にすぎない）

自分なりに価値観を設けて 自分の意見を明確に語るができる上で
他者の独自の価値体系を認識しながら 周囲の期待を考慮し
意志決定して自律的に行動できる。

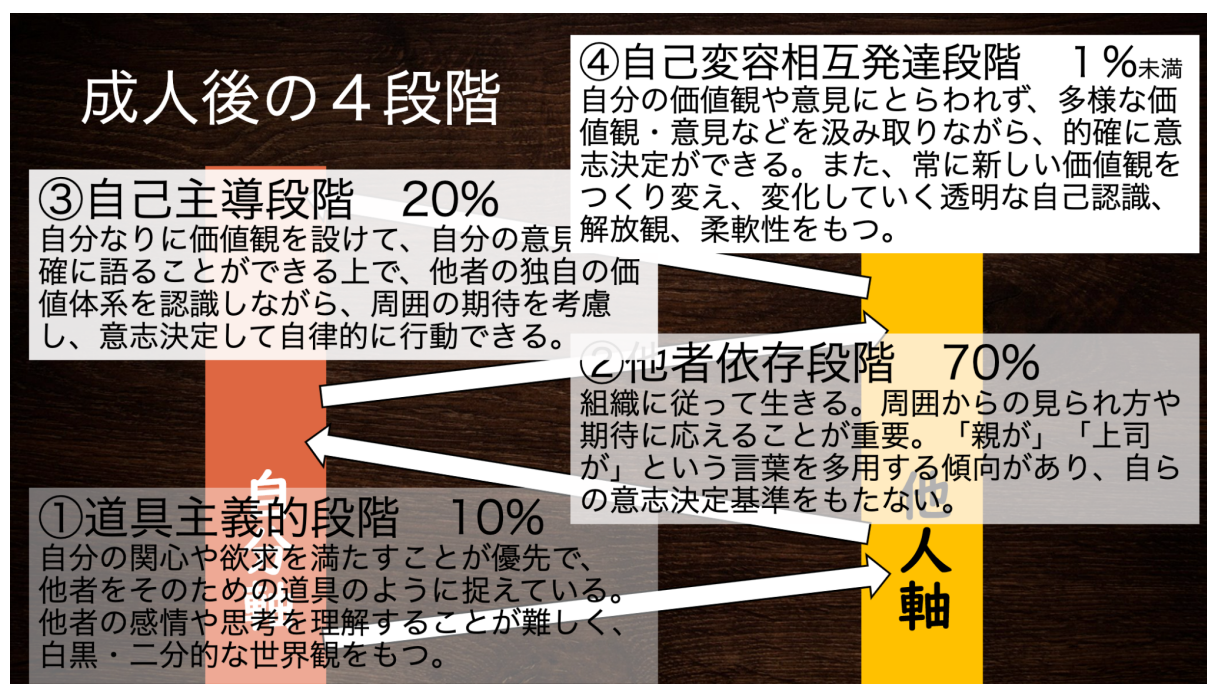
最後の第4段階です。

④自己変容 相互発達段階（1%未満）

自分の価値観や意見にとらわれず 多様な価値観 意見などを汲み取りながら
的確に意志決定ができる。

また常に新しい価値観をつくり変え

変化していく透明な自己認識 解放観 柔軟性をもつ。



つまり 人は「これまでの自分」を手放すことで広がるから 成長していく
この「自分を手放す」のに 枠を広げるのには 勇気が必要ですよね。
その段階が上がるほど 世界を認識できる方法が変わり
広く深くなっていくという訳です。

ですから

親として 子どもの先回りをして

あれもこれもと準備したり 世話を焼いたりするのではなく

肩の力を抜いて

その時の子どもの成長段階に応じた役割に フォーカスすることが大切です。

親が 子を成長させる訳ではありません。

自分軸と他人軸を 行ったり来たりしながら

子どもたちは 自分の枠を 自分で広げて行くのですね。

つまり 全部親がやらなければ！と思わなくて良いのです。

では 親としての「他人軸」の役割とは？

成長に必要な3つの存在

①仲間

自分の成長を願ってくれる人

ポジティブフィードバックをくれる人

共に歩める安心感がもてる仲間ということ

②習慣化

PDSA

計画(plan)→実施(do)→研究(study)→改善(act)

ビジネス用語でもあるこの言葉

日々の成長に気づき 自信と進歩を感じることで、成長が習慣化します。

この気づきを与えて 改善のサポートをする役割が大切と いうことですね。

③新たな視点

自分の強み、リソースを気づかせてくれる存在がいるかどうか。

色々なやり方で 可能性を広げるアドバイスをくれる人が必要。

このアドバイスですが

大人はそのつもりでも 子どもにとっては

必ずしも 素直に助言と受け取ることができないケースが多いのも 実情です。

そこで！

子どもたちからの心の叫び

勉強で言われたくない言葉

ランキング第3位

「ちゃんと勉強してるの？」

つい口に出てしまう言葉のひとつですが これは受験生に限らず

あらゆる学年で挙がるネガティブワードです。

保護者の皆さん 口に出す前に「勉強」を

「仕事」や「家事」に置き換えてみてください。

ランキング第2位

「何時から勉強始めるの？」

リビングで聞かれる言葉の代表格。

深い意味を含んでいないつもりでも

いつまでだらだらしているのかという戒めにも。

子どもからすると 大きな圧を感じる一言ですが

「そろそろ言われそう」な雰囲気も感じ取っていることも多いです。

ランキング第1位

「お兄ちゃんはそれできてたよ」

兄弟姉妹 親戚 知り合いとの比較はNGワードです。

「そう言われても、何の解決にもならないし、自分は自分…」と思うのが受け取る側の正直なところでしょう。

効果的な言葉がけ というのは難しいものですが、

最後にこちら

保護者の皆さんは 褒めると叱るのどちらが得意でしょうか？

子どもの「やりたい」「変わりたい」「がんばりたい」を引き出すのはどちらでしょう？

褒め、ですよ。

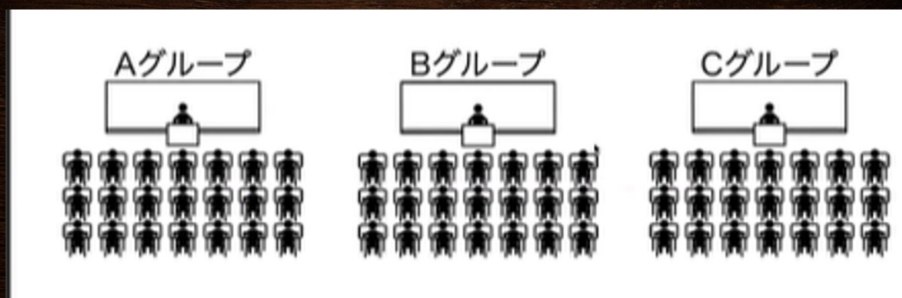
実験

エリザベス・ハーロック博士による実験(1925年)

褒めると成長が促される

なぜ 褒めることが推奨されるのか を裏付けるものになります。

エリザベス・ハーロック博士による実験 (1925年)



実験内容

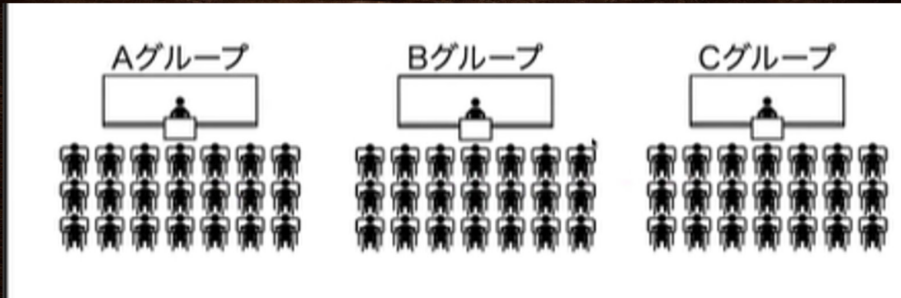
9～11歳の生徒をABCの3グループに分け 算数のテストを5日間繰り返す。

問題 テスト時間などの条件はすべて同じ



エリザベス・ハーロック博士による実験 (1925年)

褒める 叱る 無言



答案用紙を返却する際の先生の態度のみをグループによって変更した。

A:どんな結果でも できていた箇所を褒める

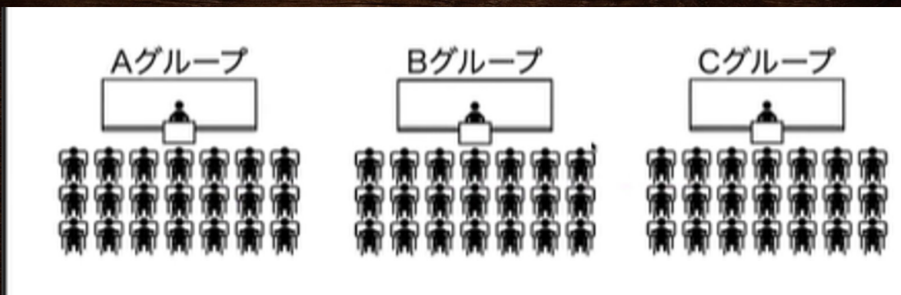
B:どんな結果でも できていない箇所を叱る

C:どんな結果でも 何も言わない



エリザベス・ハーロック博士による実験 (1925年)

71% 19% 5%



その結果

A:日ごとに成績が上がり 最終日には約71%の生徒の成績が上昇

B:2日目には約19%の生徒の成績が上昇したが その後次第に低下

C: 2日目には約5%の生徒の成績が上昇したが その後ほとんど変化無し

つまり

褒めても叱っても無視しても人は成長する。

しかし 成長度が違う。伸びが違う。

何を褒めると効果的なのか？

能力や結果を褒めるより 努力の過程を褒めると良い。

あなたは頭がいいね ではなく 毎日コツコツできた成果だね。

満点取れたなんて天才だね よりも テスト前に集中して頑張っていたものね。

とはいえ 褒めてばかりはいられない。

良いことは良い 悪いことは悪い わけです。

しかし

叱るというのは 実は難しいことです。

その理由はこちら

怒る

自分の感情を処理するため

叱る

相手の成長、変化、気づきのための期待 ＝軌道修正

怒る＝自分の感情を処理するため

叱る＝相手の成長・変化を望む 気づきのための期待をする＝軌道修正

この違いが 大人の側もあいまいなんですね。

どうしても感情的になってしまうこともあります。

ただ 叱りっぱなしは無責任ですので フォローが肝心です。

叱ったことが軌道修正できていたら 次に褒める材料になる！

褒める:叱るの黄金比は5:1

しっかり褒めて、次のひとつを示す

とはいえ

いやいや、私だって日々必死に子育てをしている
たまには 私が褒められたい という気分にもなります。

しかし

脳は 人称を認識できない =人を褒めていると 自分の脳も満たされる
褒めは 子どもにとっても 大人にとっても大切です

思ってもいない 歯が浮くような 褒め言葉を探す？

そんな褒められることがあるだろうか？ もやもや感 →事実を言うで良い

例えば

今日の午前中 一回もリビングに降りてこなかったね 集中して勉強できたね。
自分で計画立ててみたんだ すごいね うまく進められるといいね。

一方で

叱るのは 気づいたときにすぐ！ 理由は 軌道修正だから
くれぐれも 叱る時には 以前のことまで持ち出さないことが肝心

子どものどこを見て、何を子どもに伝えるか

私も日々 試行錯誤しています。

これまでの10数年

かけがえのないものが

かけがえのないものに印をつけていくような時間だったと

振り返ったりもします。

15歳の子どもたちは そんな私たち大人の ほんの一瞬の中を生きています。

遠い将来 子どもたちがいつか大人になった時に

思い出す何かを 今 与えられているだろうか

思い出せば 歩いていく力になる何かに 今 出会えているだろうか

と 自問自答する日々です

でもその答えは 何か特別なところにあるのではなく

家族で過ごす日常の中にあるはずです。

あの時かけてくれた言葉に救われた

あの時 自分を信頼して励ましてくれたという原体験

子どもたちの成長に合わせて 役割を果たすスタンスで

これまで通り 一番近くから子どもたちを見守ってください。

私からのお話は以上です。(宮澤)